戦前の北海道におけるスキーコース網の形成過程と地域形成

DEVELOPMENT PROCESS OF SKI COURSE NETWORKS AND ADJACENT AREA IN HOKKAIDO BEFORE THE SECOND WORLD WAR

小澤 丈夫*
Takeo OZAWA

Since modern ski was introduced in Japan in 1911, networks of ski tour courses were actively developed in Hokkaido until the Second World War. In the early stage ski courses were developed from the suburb of Sapporo and Otaru, the other area by railway stations on Hakodate line, then formed broad networks in mountains with ski huts and hot springs. As they were close to the daily life in snowy district, they should be considered as regional resources. This paper aims to clarify the development process and background of the ski course networks and adjacent area to support the further development in such regions.

Keywords : Hokkaido, Ski, Hut, Hütte, Hot Spring, Sapporo, Otaru,

北海道, スキー, 山小屋, 温泉, 小樽, 札幌

1. はじめに

昭和10年(1935年)1月北海道帝国大学文芸会スキー部(以下北大スキー部)が発行した「札幌附近のスキーコース図」(図1)には、札幌市、小樽市、定山溪温泉に及ぶ広域に、13軒の山小屋とスキーに適したスロープを有する壮大なスキーコース網が描かれている¹⁾。これは、北大スキー部が、大正15年(1926年)札幌市手稲山滝の沢上流に国内初のスキーヒュッテであるパラダイスヒュッテを建設したことを端緒に、北大スキー部部長大野精七²⁾が語り、同医学部教授山崎春雄³⁾、予科ドイツ語教師アーノルド・グブラー、スイス人建築家マックス・ヒンデル⁴⁾らの協力を得て進められた、スキーツアーの楽しさを広めるための構想“山小屋の連鎖”⁵⁾が具現化されたものと捉えられる。一方、昭和9年1月札幌鉄道局が発行した「ニセコアンヌプリを中心とするスキーコース図」(図2)には、ニセコアンヌプリを中心とし、岩内町、小樽村、倶知安町、狩太村、蘭越の各駅、明治時代に開かれた6箇所の温泉、スキーに適したスロープを結ぶ広範なスキーコース網が描かれている。

日本における近代スキーの発祥は、オーストリア軍参謀少佐テオドール・エドラー・フォン・レルヒ(以下フォン・レルヒ)による、明治44年(1911年)1月～2月の高田市(現上越市)、並びに明治45年2月～3月の旭川市におけるスキー講習会とされるが⁶⁾、これから四半世紀足らずを経た昭和10年頃に、北海道の冬期山岳空間において、鉄道駅・山小屋・温泉を拠点とした広域にわたるスキーコース網が形成されていたことになる。これらは、北海道の戦前期に開拓された独自の冬期山岳空間であるという点だけでなく、雪国の生活文化に密着し、道外から観光客を誘致した北海道の地域資源として捉えられるべきものと筆者は考える。やがて、これらのスキーコース網は、昭和12年2月に始まる日中戦争以降、拡充の勢いを失う。第二次大戦後はスキーリフトの導入によるゲレンデスキーが主流に

なり、スキーコースは往事の活気を再び取り戻すことはなく、現在利用されているスキーコースはその一部に限られている。しかし、北海道には、例えばニセコひらふ地区や富良野市北の峰地区のように、地域形成がこのようなスキーコース網の形成と密接に関わってきた事例が見られる⁷⁾。今後これらの地域の価値を再評価し、地域づくりを支援するためにも、その前史を明らかにしておく必要がある。

関連する文献や既往研究に、スキー技術の発達に関係した人物や団体に関するもの^{5), 6), 8)}、山小屋に関するもの⁹⁾、地理学におけるスキー集落形成についての研究¹⁰⁾などが見られるが、スキーコース網と関連する地域の形成過程、実態、背景について、包括的に明らかにしたものは見られない。そこで本研究は、スキーに関する各種案内書を史料とした文献調査をもとに、大正期から昭和期戦前の山岳空間における地域形成の過程と背景の一端を、当時急速に拡充されたスキーコース網との関係から明らかにすることを目的としている。

対象とする文献は、北海道における近代スキーの発祥から大正期までの史実を明らかにした中浦皓至による論文¹¹⁾、今回筆者が管見した鉄道省と札幌鉄道局¹²⁾並びに民間によって戦前に出版された一般向け旅行案内書¹³⁾とスキーコース図(表2)、スキーコースの拠点となる山小屋を紹介した日本山岳会による『山日記』¹⁴⁾である。

2. 大正期における郊外地と鉄道駅を起点としたスキーコース網の形成

中浦論文では、大正期における北海道スキーの発展と普及において、札幌と小樽の2つの核が存在し、両者を起点にスキーコースが開かれていった様子が述べられている。中浦論文から、札幌と小樽におけるスキー発祥に関する記述を以下に要約する。「札幌では、明治45年(1912年)三週間にわたるフォン・レルヒの旭川講習を受講したばかりの月寒歩兵第二十五連隊所属の三瓶勝美、松倉儀助、中沢治平らが、3月14日から一週間月寒において軍人・民間人にスキー

* 北海道大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., Dr. Eng.

図1 「札幌附近のスキーコース図」（北大スキー部、昭和10年） 鉄道線、駅名、山岳名、山小屋番号は筆者加筆

講習会を行う。講習会終了後には、札幌郊外の山にスキー滑走に出かけ、3月29日と31日の2回にわたり藻岩山登山を行い、これが札幌における最初のスキー登山となり、続く4月5日には三角山登山を行った。講習会参加者には、北大予科の学生も含まれており¹⁵⁾、彼らは直ちに北大文武会にスキー部創設許可を申請し、大正元年（1912年）9月21日に認可、北大スキー部が日本で初めての大学スキー部として設立される。同年12月には、北大とスキー4団体¹⁶⁾合同によるスキー講習会が札幌三角山にて開催され約150名が参加した。これ以降札幌では、北大スキー部が講習会の実施、スキー技術の研究、教程の出版など中心的役割を担う¹⁷⁾。一方、小樽では明治44年4月に開校された小樽高等商業学校（現小樽商科大学、以下小樽高商）

初代校長渡辺龍聖が、明治45年2月に講師苦米地英俊を高田に派遣、苦米地は2月21日に小樽にスキーを持ち帰り講習会を開催する。以降スキーの講習が、連日小樽高商附近の地獄坂一帯で行われ小樽新聞社によって宣伝される。旭川でのフォン・レルヒによる講習会を受講したばかりの3名¹⁸⁾もスキー技術を伝えた。同年10月5日には、北大に半月遅れて全国2番目の大学スキー部として小樽高商スキー部が設立され、以降、小樽では小樽高商や小樽新聞社が中心となってスキーを発展させる。このように、札幌と小樽は、ほぼ同時期に各々独自のルートでスキーを発祥させた。¹⁹⁾

さらに、同論文から、スキーコース網の形成が始まる様子に関する記述を要約する。「藻岩山と三角山の冬期初登山後、北大スキー部

図2 「ニセコアンヌプリを中心とするスキーコース圖」(札幌鉄道局、昭和9年) 鉄道線、駅名、山岳名、温泉名は筆者加筆

は大正2年2月、琴似駅から手稲山の初登頂にも成功する。小樽では、大正2年1月小樽高商生青木茂弥らが、余市までスキー遠征を行い、同月天狗山登山を成功させる。また、ノルウェー留学から最新のスキー技術を習得して帰国した北大遠藤吉三郎教授が、大正5年に小樽郊外毛無山にスキールートを開き、以降小樽高商は、天狗山と毛無山に毎年のように遠征し、大正8年2月には遠藤山ツアーを行う。大正5年に始められた北大スキー部の合宿は、小樽の地獄坂付近において3年にわたって行われたが、大正8年以降、北大スキー部の合宿は、ニセコにおいて行われ、ニセコアンヌプリを中心としたスキーコースの形成に貢献する。」²⁰⁾以上の内容を、本研究では、札幌、小樽、ニセコアンヌプリ附近のスキーコース網形成の端緒とした。

今回筆者が調査した旅行案内書によって、北海道のスキーが初めて紹介されるのは、『鉄道旅行案内』(鉄道院、大正7年)内の、札幌附近ならびに小樽附近に「スキー好適地あり」という簡潔な記述である²¹⁾。同大正10年版では、軽川駅(現手稲駅)が「スキー好適地」として新たに追加される。札幌鉄道局発行の旅行案内書の中で、スキーに関して触れられるのは、『驛附近案内標解説』(札幌鉄道局、大正11年)である。これには、各駅に設置された附近の案内標の内容が駅ごとに図示され、軽川驛で手稲山が、昆布驛で青山温泉²²⁾が、「スキーの好適地」と紹介されている。『北海道各驛案内』(札幌鉄道局、大正12年)では、昆布驛、比羅夫驛、小樽驛、南小樽驛、軽川驛、琴似驛の6駅について、それまでの案内書より詳しく紹介され²³⁾、巻末の附録には、年中行事、釣遊地案内、狩猟地案内、馬市と共にスキー地案内が記載、6駅附近のスキー場が一覧表になっている。琴似驛の欄には、「南半里三角山及ツツジ山附近はスキーの適地(十二月下旬から三月上旬までがよい)として知られ、三角山には、北海道帝国大学文武會スキー部で施設した完全なジャンプ臺もある」と記述され、軽川驛の欄には、手稲山の説明として、「山の北麓石狩無線電信所付近はスキーの好適地として早くから知られ、緩急各種の

斜面に富み、雪の質も良いので毎年十二月中旬から三月中旬までは非常な盛況を呈する」と記述されている。前述の通り、すでに北大スキー部の合宿が近傍で行われていた昆布驛は、「附近はスキーの適地として知られてゐる。」さらに附近の青山温泉について「冬はスキー地として賑ふ。」と記述され、スキー発祥から10年余りの時期に、これらの地域がスキー場として人々に親しまれていたことが伺える。

『スキーとスケート』(鉄道省 大正13年)は、筆者が管見した中では、スキー場の紹介に特化して作られた初めての旅行案内書で、この中の「本邦スキー及スケート地一覧」には、省線・社線の鉄道網・スキー地・スケート地の位置が、拠点となる駅や附近の温泉と共に図示されている。道内では、函館本線に沿うニセコ附近から小樽・札幌附近、空知、旭川、留萌、網走、野付牛(現北見)附近に、計14箇所のスキー地の所在が確認できる(図3)。さらに、地域ごとの詳細図も掲載され、北海道では、「小樽附近スキー地」(図4)、「札幌附近スキー地」(図5)「手稲山附近」(図1)に掲載範囲を図示、「青山温泉附近スキー地」(図2)に掲載範囲を図示)の4箇所についての図版がある。記載内容は、スキー滑走路、練習用斜面、スキー登山の対象峰、主要山岳、拠点駅、温泉(スキー合宿地)である。以上から、大正13年において、札幌と小樽の市街地と、銭函、軽川、琴似、昆布の各鉄道駅を起点にしたスキーコース網が形成されていた様子を把握できる。

3. 昭和期戦前における山小屋と温泉を拠点としたスキーコース網の発展と地域形成

前述の通り、北大スキー部は、大正15年手稲山にパラダイスヒュッテを建設する。スキーヒュッテとして専用小屋を新設する機運が盛り上がるのは昭和4年～5年以降で、パラダイスヒュッテは、こうした機運以前に建てられた本邦初の本格的なスイス式スキーヒュッテであった²⁴⁾。角幸博によると、パラダイスヒュッテは、「1925年5月のスキー部幹事会でスキーヒュッテの建設が決まり、6月14日大

十勝岳及び上富良野周辺、名寄等についても詳しく説明している。
巻末に17軒の主要山小屋が挙げられており、内15軒は札幌・小樽・
定山溪エリアのもの、2軒は十勝岳のものである。

『スキーコース図』（札幌鉄道局 昭和9年）では、「札幌小樽附近
スキーコース図」に加えて、「ニセコアンヌプリを中心とするスキー
コース図」（図2）「十勝連峯冬季登山コース図」「蘆別岳スキーコー

ス図」が掲載されている。「札幌小樽附近スキーコース図」（図1に
掲載範囲の一部を図示）では、昭和5年版記載の4つの山小屋に加
えて、白樺ヒュッテ（白樺小舎、小樽定山溪自動車会社）、右股小屋（北
海道廳）、峠ノ小屋（峠ノ小舎、小樽定山溪自動車会社）、東日ヒュッ
テ（札幌スキー連盟）が記載され、昭和5年版スキーコース図よりも、
スキーコース数が増えネットワークが充実している。札幌の三角山

表1『山日記』に掲載された戦前の北海道における山小屋

山小屋名	所在地	建設年	所属	収容人数	山日記掲載					
					S5	S7	S8	S11	S24	
1 モーラップ巡視小屋	支笏湖畔モーラップ	大正8年	帝室林野局苫小牧出張所	13人	○	○	○	○	△	
2 羊蹄山頂石室	羊蹄山九合目	大正12年	北海道山岳会	50人	○	○	○	○	○	
3 奥名寄巡視小屋	奥名寄農地予定地(本流奥)	大正12年	帝室林野局名寄出張所	8人	○	○				
4 旭岳石室	旭岳西麓見地畔	大正13年	北海道庁林務課 管理・旭川森林事務所	40人	○	○	○	○		
5 黒岳石室	黒岳西南約1km	大正13年	北海道庁林務課 経営・大雪山調査会	60人	○	○	○	○	○	
6 十勝岳石室	十勝岳頂上東北の肩	大正14年	北海道庁林務課	30人	○	○	○	○	○	
7 パラダイスヒュッテ	手稲山麓ノ沢左股沢頭	大正15年	北大スキー部	30人	○	○	○	○	○	
8 美幌越巡視小屋	屈斜路湖畔近郊	大正15年	帝室林野局弟子屈出張所	20人	○	○	○	○	○	
9 阿寒越巡視小屋	弟子屈阿寒の途中	大正15年	帝室林野局弟子屈出張所	20人	○	○	○	○	○	
10 ヘルヴェチアヒュッテ	小樽川上流、白井岳北麓	昭和2年	北大・山崎春雄教授	12人	○	○	○	○	○	
11 シビナイ小屋	石狩川上流シビナイ川合流点	昭和2年	北大山岳部	8人	○					
12 カネオベツ休泊小屋	大夕張カネオベツ川筋	昭和2年	帝室林野局夕張出張所	10人	○	○	○	○	○	
13 吹上温泉スキー小屋	十勝岳西麓硫黄山南下	昭和2年	飛沢清次	20人	○	○	○	○	△	
14 空沼小屋	空沼岳中腹万計沼畔	昭和3年	秩父宮家	16人	○	○	○	○	○	
15 中山ヒュッテ	中山峠南側	昭和3年	北海道山岳会	20人	○	○	○	○	○	
16 二股造林小屋	豊平川上流、空沼入沢合流点	昭和3年	札幌帝室林野局	20人	○	○	○	○	○	
17 戸蔭別川小屋	戸蔭別川上流	昭和3年	北大山岳部	8人	○					
18 尾札部巡視小屋	尾札部川上流	昭和3年	帝室林野局弟子屈出張所	20人	○	○	○	○	△	
19 朝里岳ヒュッテ	朝里岳北麓	昭和4年	小樽スキー倶楽部	20人	○	○	○	○	×	
20 羽幌中二股休泊小屋	羽幌川上流中二股	昭和4年	帝室林野局羽幌出張所	6人	○	○				
21 万計造林小屋	空沼岳中腹万計沼畔	昭和4年	帝室林野局札幌出張所	20人	○	○	○	○	○	
22 シシャモナイ巡視小屋	支笏湖畔シシャモナイ	昭和4年	帝室林野局苫小牧出張所	13人	○	○	○			
23 阿寒石室	阿寒岳八合目	-		10人	○					
24 恵庭登山小屋	恵庭岳六合目	-	帝室林野局材木事務所	15人	○	○	○	○	×	
25 美瑛本流造林休泊小屋	美瑛川上流	昭和4年	帝室林野局旭川出張所	10人			○	○	○	
26 奥戸別巡視小屋	戸別川上流	昭和4年	帝室林野局上戸別出張所	6人			○	○		
27 ユーニシカリ小屋	石狩川上流ユーニシカリ川合流点	昭和4年	旭川営林区署	10人	○	○	○			
28 白樺小舎	小樽定山溪道路 ヘルヴェチアヒュッテ西方	昭和5年	小樽定山溪自動車会社	30人				○	×	
29 奥手稲山ノ家	奥手稲の山の南方、ユートピアとの中間	昭和5年	札幌鉄道局	50人		○	○	○	○	
30 左股巡視小屋	幾春別川上流	昭和5年	帝室林野局若見沢出張所	6人			○	○	○	
31 天狗岳ヒュッテ	小樽天狗岳	昭和6年	小樽スキークラブ	6人		○	○	○	△	
32 長門ヒュッテ	定山溪白井川上流 長門鉾山跡	昭和6年	北大スキー部	7人		○	○	○	×	
33 無意根小屋	豊平川上流	昭和6年	北大医学部大野精七 管理・鈴木重雄	15人		○	○	○	○	
34 室蘭岳ヒュッテ	室蘭市香川町	昭和6年	室蘭市役所内室蘭宣伝協会	100人				○		
35 ニセカウシユベ小屋	ニセカウシユベ山中原	昭和6年	旭川営林事務所	10人		○	○	○	△	
36 雌阿寒営林署番小屋	雌阿寒岳鶏ヶ峰東方	-	阿寒営林所	10人		○	○	○		
37 似様小屋	上土別村似様移民地最奥	昭和6年	帝室林野局土別出張所	20人			○	○	×	
38 日陰沢休泊小屋	夕張川奥二股	昭和6年	帝室林野局夕張出張所	30人			○	○		
39 美留和第二休泊小屋	美留和駅東3km	昭和6年	帝室林野局弟子屈出張所	15人					△	
40 雄鬼頭小屋	奥土別鬼頭沢奥	昭和6年	帝室林野局土別出張所	20人			○	○		
41 十勝岳監視小舎(白銀荘)	吹上温泉東北方	昭和7年	北海道庁 管理・富良野営林区署	15人			○	○	○	
42 天塩岳小屋	土別村ボンテンオ奥	昭和7年	帝室林野局土別出張所	20人			○	○	○	
43 右股小屋	手稲村字右股	昭和7年	北海道庁秘書課内右股小屋会	20人			○	○	×	
44 鳴川の小舎	横津岳中原	昭和7年	日魯漁業会社燭光会スキー部	30人			○	○	△	
45 奥無意根小屋	薄別川上流	昭和7年	有原豊平	20人			○	○	△	
46 美瑛忠別造林小屋	美瑛御料地	昭和7年	帝室林野局旭川出張所	10人			○	○	×	
47 摩周湖巡視小屋	屈斜路湖	昭和7年	帝室林野局弟子屈出張所	10人			○	○	△	
48 勝岳荘	吹上温泉東北方	昭和7年	上富良野十勝勝勝会	50人				○	○	
49 冷水小屋	札幌岳冷水沢上流	昭和8年	定山溪鉄道	40人				○	○	
50 銀嶺荘	銭函峠西北方春香山麓	昭和8年	北海タイムス 河合操石	80人					△	
51 摩周湖視兼造林小屋	摩周湖	昭和8年	帝室林野局弟子屈出張所	35人				○		
52 甲一線小屋	上土別村ベンケ甲一線奥	昭和8年	帝室林野局土別出張所	20人				○	○	
53 奥春別休泊小屋	弟子屈～阿寒越道路側	昭和8年	帝室林野局弟子屈出張所	35人					△	
54 東日ヒュッテ	砥石山麓ノ沢	昭和9年	札幌スキー連盟	30人				○	×	
55 峠ノ小舎	小樽定山溪道路の峠	昭和9年	小樽定山溪自動車会社	15人				○	×	
56 オロフレ山スキー休憩小屋	オロフレ山西南方羅漢山西方	昭和9年	室蘭運輸事務所	10人				○	△	
57 滝ノ沢休泊小屋	夕張岳西方ベンケモユバロ川上流	昭和9年	帝室林野局夕張出張所	35人				○	△	
58 ユコマンベツ温泉小屋	旭岳西南ユコマンベツ川上流	昭和10年	北海道景勝地協会	30人				○	×	
59 愛山溪造林小屋	愛山溪温泉	昭和10年	旭川森林事務所	10人				○	×	
60 愛山溪ヒュッテ	愛山溪温泉付近	昭和10年	村上元吉	60人					×	
61 夕張岳休泊小屋	夕張岳西南白金川上流	昭和10年	帝室林野局夕張出張所	25人				○	△	
62 登和里小屋	上土別村登和里奥	昭和10年	帝室林野局土別出張所	20人				○	△	
63 咲来小屋	上土別村咲来沢岩尾内農地奥	昭和10年	帝室林野局土別出張所	20人				○	○	
64 愛山溪温泉(旅館)	安足間駅より16km	昭和11年	村上元吉	40人					×	
65 志計礼別休泊小屋	弟子屈農地内	昭和11年	帝室林野局弟子屈出張所	40人					△	
66 札友第二休泊小屋	美留和駅西南6km	昭和11年	帝室林野局弟子屈出張所	40人					△	
67 摩周第二休泊小屋	弟子屈より6km湖側	昭和11年	帝室林野局弟子屈出張所	15人					△	
68 裏鬼頭小屋	土別町、天塩川森林鉄道沿線	昭和11年	帝室林野局第一土別出張所	10人					○	
69 本流奥休泊小屋	夕張川シューバロ川上流	昭和11年	帝室林野局夕張出張所	20人					○	
70 北海製缶ヒュッテ	塩谷丸山東麓	昭和12年	北海製缶倉庫会社健康保険組合	20人					×	
71 ニセコ山の家	ニセコアンヌプリとイワオヌプリとの鞍部	昭和12年	札幌鉄道局	44人					○	
72 似様移民地小屋	似様川流域移民地 鉄道終点	昭和12年	帝室林野局第一土別出張所	10人		凡例			×	
73 跡佐登第四休泊小屋	川湯より4km東北	昭和13年	帝室林野局弟子屈出張所	15人		○：使用可			△	
74 夕映橋休泊小屋	奥春別休泊小屋の4km西側	昭和13年	帝室林野局弟子屈出張所	30人					△	
75 天塩岳左股小屋	天塩岳山麓 森林鉄道終点から4km	昭和13年	帝室林野局第一土別出張所	30人		△：不明			○	
76 トムラウシ山避難小屋	瓢箪沼畔	昭和15年	北海道景勝地協会	10人					×	
77 網走越第一休泊小屋	美幌峠の下国道	昭和15年	帝室林野局弟子屈出張所	15人		×			△	
78 和琴休泊小屋	和琴温泉付近	昭和15年	帝室林野局弟子屈出張所	60人				(損傷のため)	△	
79 勇駒別山の家	旭岳山麓湯沼の畔	昭和15年	帝室林野局旭川出張所	26人					○	
80 美瑛富士避難小屋	美瑛富士南側	昭和15年	帝室林野局旭川出張所	14人					×	
81 毛無山ヒュッテ	毛無山～小樽峠の中間	昭和16年	小樽スキー連盟						△	

『スキー北海道』（昭和13年）に記載されているスキーコースに、関連していると見られる山小屋には網掛をした。

25軒 28軒 39軒 52軒 61軒

山麓、圓山、藻岩山附近にまたがる広大なスキー練習場と大倉山シャンツェ、また小樽中心市街地に近い花園公園、小樽高商附近、天狗山附近、潮見臺に点在するスキー練習場、天狗山シャンツェ、高商シャンツェ、小樽シャンツェ、樽中シャンツェなど4つのジャンプ台が確認でき、スキーコース網が札幌、小樽の市街地と接続する場所において、スキーの練習や競技を行う場が整備されている。「ニセコアンヌプリを中心とするスキーコース図」では、倶知安町、岩内町、蘭越驛、昆布驛、狩太驛、比羅夫驛、小澤驛を拠点として、新見温泉、昆布温泉、青山温泉、湯本温泉、山田温泉等を結ぶスキーコース網が『スキーとスケート』（大正13年）掲載のスキーコース図よりも広範囲に描かれている。山小屋は昆布温泉附近に休憩小屋が1軒³⁴⁾記載されているのみで、温泉がネットワークの中継点となっている点と、温泉周辺にスキー練習場が分布している点が特徴的である。

『札幌附近のスキーコース図』（北大スキー部 昭和10年）（図1）は、冒頭で触れた札幌・小樽・定山溪広域エリアを描いたスキーコース図で、山岳、鉄道駅、スキーコース、スキー練習場、山小屋が図示されている。これまで鉄道省又は札幌鉄道局によって作成されたスキーコース図には、省線ではない定山溪鉄道沿線のスキーコースについては、記述はあるが図示はされていなかった³⁵⁾。本図により、大正15年のパラダイスヒュッテ建設から僅か10年の間に、札幌・小樽・定山溪の広域にまたがるスキーコース網と“山小屋の連鎖”が、概ね形成されていたことを確認できる。

『スキー北海道』（札幌鉄道局 昭和13年）は、戦前における北海道のスキーに関する旅行案内書の中では最も詳しい。横津岳附近、ニセコアン附近、小樽附近、札幌附近、定山溪付近、十勝岳附近、大雪山麓、名寄附近他について、限られた範囲ではあるがスキーコース略図が掲載、主たる山岳やスキー場について記述されている。³⁶⁾

昭和5年から13年の間には、民間によるスキーに特化した旅行案内書も多数発行されている（表2）。これらの案内書の内容は、札幌鉄道局発行のものと類似しているが、この時期に民間から多くの案内書が出版されたことは、一般大衆が北海道のスキーに寄せた関心の高さを裏付けるものと言えるであろう。

以上から、戦前の北海道における主要なスキーエリアが、ほぼかたちづくられたと考えられる昭和10年頃の様子を見るため、札幌鉄道局発行の『スキーコース図』（昭和9年）と『スキー北海道』（昭和13年）によって、スキーコースの所在を11エリアに分けて整理しスキー場所在駅と共に図示した（図6）。図6と表1を合わせて見ることで、スキーコース網と山小屋の関係について、以下のことがわかる。札幌・小樽・定山溪エリアには、スキーコースと関連をもつ山小屋が20軒あり、その内、民間企業・個人・北大・スキー連盟によるものが計15軒、秩父宮1軒、札幌鉄道局1軒、林野局2軒、北海道庁1軒から、このエリアの山小屋建設は、北大や民間を主体とした様々な担い手によって進められたと言える。20軒の内18軒は、大正15年から昭和9年の間に集中的に建設されている。大雪山麓には、スキーコースと関連をもつ山小屋が7軒あり、この内、林野局・林務課が4軒、民間が3軒である。十勝連峰には同様の山小屋が6軒あり、林野局・林務課4軒、民間2軒である。大雪山麓7軒の内5軒、十勝連峰6軒のうち5軒が、昭和10年までに建設されており、両者は、札幌・小樽・定山溪一帯にやや遅れながらも、ほぼ同時期に山小屋が官と民によって整備されたことがわかる。ニセコアンヌ

プリ附近については、点在する温泉がスキーコース網の拠点となっているため、羊蹄山石室とニセコ山の家2軒しか建設されていない。他にスキーコースとの関連が確認できるのは、函館附近と室蘭附近に各1軒である。その他に、弟子屈14軒、士別・上士別9軒、空知6軒などの山小屋があるが、すべて林野局・林務課によるもので、スキーコースとの明らかな関連は認められない。

4. まとめ

表2は、本研究で調査対象とした旅行案内書とスキーコース図を、スキー発達史の要点と共に年表にしたものである。以下に、大正期から昭和期戦前におけるスキーコース網拡充に関連した地域の形成とその背景について、スキーコース網形成との関係から纏める。

北海道において近代スキーが発祥した明治45年は、すでに函館、札幌、旭川、釧路を結ぶ幹線鉄道が敷設され、さらに道北と道東方面にも延伸される時期であった。当時スキー界をリードしていた札幌と小樽の両市街地郊外から始まったスキーコースは、大正期にまず函館本線上の軽川駅附近や昆布駅附近へ、続いて空知、旭川附近、留萌、網走、野付牛へと鉄道駅を起点にしながら広がった。札幌と小樽間では、大正15年に北大スキー部が建設したパラダイスヒュッテを端緒に、次々と山小屋が建設され、スキーコース網はこれらを拠点に南部の山岳地帯に広がり、昭和10年頃には、主に北大と民間が所有する20軒の山小屋を有し、定山溪に及ぶ広範囲なものとなった。札幌や小樽と関係の深いニセコアンヌプリ附近では、大正8年から北大スキー部の合宿が行われるようになったことが契機となり、昭和9年までに温泉を拠点としたスキーコース網が形成された。大雪山麓と十勝連峰でも、小樽・札幌にやや遅れながらも、官と民による山小屋と温泉を拠点とするスキーコース網が形成された。その他にも、昭和10年頃の北海道には、広くネットワークまでは形成しないものの、鉄道駅や市街地と結びついたスキー練習場、山岳単独のスキーコースを多数確認できる。

一方、大正9年に「札幌と小樽の中学校スキー大会」（北大スキー部主催）が開催されたことにより、同年は日本における競技スキー元年と見なされている³⁷⁾。同年、札幌近郊の三角山山麓ツツジ山の仮設シャンツェにおいて第1回ジャンプ大会が開催、大正11年12月には、三角山にはじめての固定式シャンツェの工事開始、以降、札幌と小樽の近郊に多くのジャンプ台が建設される³⁸⁾。大正12年には、小樽スキー倶楽部が北大スキー部と小樽高商スキー部の支援をうけることを条件に、第1回全日本スキー選手権大会（日本体育協会主催）が小樽で開催され³⁹⁾、大正14年2月全日本スキー連盟（SAJ）設立、翌大正15年2月SAJは国際スキー連盟（FIS）に加盟、スキーの全国的な組織体制が整うが、SAJ主催の全国大会開催地を見ると、昭和3年の第6回全日本スキー選手権札幌大会から昭和18年まで、ほぼ毎年札幌または小樽において全日本スキー選手権大会又は全日本学生スキー選手権大会が行われている⁴⁰⁾（表2）。また、社会情勢の悪化により中止されたが、昭和15年には札幌において冬季五輪の開催が準備されていた。このように、大正期から昭和期戦前の札幌と小樽は日本のスキー発展の先進的かつ中心的な舞台であった。

旅行案内書におけるスキーの紹介は、管見した中では、鉄道院による大正7年『鉄道旅行案内』から始まる。鉄道省は、大正13年からスキーに特化した案内書やコース図を発行するが、昭和6年を最

図 6 昭和 10 年頃の鉄道、スキー地所在駅、山スキー地

表 2 北海道におけるスキー発達史概略、SAJ 公認スキー大会、主要スキー案内書とパンフレット ( ) 内はスキーに関する記述が見られない文献

年代	スキー発展史概略	SAJ 公認スキー大会	北海道のスキー場に関する旅行案内・パンフレット・図書		
			鉄道院(～T9)・鉄道省	札幌鉄道局	民間
M44 1911	フォン・レルヒによる高田スキー講習			(「北海道鉄道路線案内」) (「北海道鉄道路線概況」)	
M45 T元 1912	フォン・レルヒによる旭川スキー講習 北大スキー部、小樽高商スキー部設立		(「遊覧地案内」)		
T2 1913					
T3 1914	北大遺藤教授帰国、ノルウエー式スキー術伝授				
T4 1915			(「鉄道旅行案内」)		
T5 1916				(「北海道線各驛要覧」)	(「道内旅行便覧」)(北海道應拓殖部)
T6 1917			(「鉄道旅行案内」)		
T7 1918	仮設「シルバーシャシツェ」設置		「鉄道旅行案内」	(「北海道鉄道路線案内」)	
T8 1919			(「Japan: Traveller's handy guide 1919」)		
T9 1920	札幌—小樽間スキー駅(北大主催)		(「温泉案内」)		
T10 1921			「鉄道旅行案内」		「山とスキー」発刊(北大スキー部、～S5年頃)
T11 1922	固定式「シルバーシャシツェ」工事開始		(「The Hot springs of Japan」)	「驛附近案内標解説」	
T12 1923		第1回全日本スキー選手権大会(小樽)		「北海道鉄道各驛要覧」	
T13 1924			「スキーとスケート」 「鉄道旅行案内」		
T14 1925	全日本スキー連盟(SAJ)設立			「北海道鉄道各驛要覧」	
T15 1926	SAJが国際スキー連盟(FIS)に加盟				
S2 1927	昭和恐慌、北大山岳部がスキー部から独立				「北海道のスキーと山岳」(加納一郎)
S3 1928	秩父宮殿下来道	第6回全日本スキー選手権大会(札幌)		「北海道旅行の栞」	
S4 1929	高松宮殿下来道、世界恐慌	第2回全日本学生スキー選手権大会(札幌)	「スキーへ 昭和五年版」(運輸局)		
S5 1930	鉄道省国際観光局設置	第3回全日本学生スキー選手権大会(札幌)		「北海道スキー地案内」	「スキー適地案内」(スポーツブック)
S6 1931	満州事変		「スキーへ 昭和六年版」 (運輸局・日本旅行協会) 「温泉案内」		「スキー適地案内」(スポーツブック) 「全国スキー地案内」(河上壽雄) 「北海道の山岳」(田中三晴) 「札幌案内」(晴林堂) 「定山溪附近のスキーコース図」(定山溪鉄道)
S7 1932		第5回全日本学生スキー選手権大会(札幌)		(「温泉案内」)	「北海道の産業と景勝地」(北海道應拓殖部)
S8 1933		第11回全日本スキー選手権大会(札幌)	(「An official guide to Japan」)	「スキーへ」	「スキー地案内」(初版)(河上壽雄他)
S9 1934		第7回全日本学生スキー選手権大会(札幌)		「スキーコース図」	「スキー地案内」(増補版)(河上壽雄他)
S10 1935	「国際スキー場計画」(鉄道省国際観光局)	第13回全日本スキー選手権大会(札幌) 第8回全日本学生スキー選手権大会(小樽)	(「Japanese drama」)(国際観光局)		「札幌附近のスキーコース図」(北大スキー部) 「Winter in Hokkaido」(札幌グランドホテル)
S11 1936			「日本案内記・北海道篇」 「鉄道旅行案内」	「雪・スキー北海道」	
S12 1937	日中戦争(支那事変)	第10回全日本学生スキー選手権大会(札幌)			「銀嶺の起点定山溪」(定山溪鉄道)
S13 1938	国家総動員法 S15年開催予定夏・冬期五輪(東京・札幌)返上	第16回全日本スキー選手権大会(札幌) 第11回全日本学生スキー選手権大会(小樽・ニセコ)		「スキー北海道」	「冬山登山とスキーツアー」(新島章男)
S14 1939		第17回全日本スキー選手権大会(札幌)			
S15 1940					
S16 1941	太平洋戦争開戦	第19回全日本スキー選手権大会(札幌・小樽) 第14回全日本学生スキー選手権大会(小樽)	(「日本山岳案内第四集」)(山岳部)) 「Japan the official guide」(国際観光局)		
S17 1942			(「日本山岳案内・山岳スキー」)(山岳部))		
S18 1943		第16回全日本学生スキー選手権大会(小樽)			

後に見られなくなる一方で、これと入れ替わるように、札幌鉄道局と民間によるスキー案内書が、昭和 5 年から日中戦争開始後の昭和 13 年にかけて多数発行される。これらの案内書には、各地がスキー客で賑わう様子が記述され、この時期に北海道のスキーコースが広く紹介され、一般に受け入れられたことが伺える。

以上から、スキーという新しい文化の導入とスキーコース網の形成によって、昭和 10 年頃の北海道において、独自性をもった札幌・小樽・定山溪、ニセコアンヌプリ、大雪山山麓、十勝連峰の 4 大スキー地を中心とする冬期の山岳空間が、雪国の生活文化と密着し、多くの観光客を迎え入れる活気あふれる場であったことが明らかになった。大正期から昭和期戦前におけるスキーコース網と地域の形成と発展の背景として、鉄道網と温泉の充実、北大と小樽高商スキー部を中心とする先導的な活動と大正 14 年以降のスキー連盟によるスキー大会、民間に多くの山小屋の建設、旅行案内書を通じた活発な広報活動と一般大衆の関心の向上があり、これは、スキー文化の発展を物語る

と共に、現代のゲレンデスキーを超えたスケールの大きな地域の観光資源化の動きとして捉えられるものである。

謝辞

高澤光雄氏、在田一則氏他、北大スキー部OBの方々から貴重な史料の提供、北海道大学大学院角幸博、石本正明両先生から多くの助言を頂きました。筆者の研究室修士課程学生であった池村菜々氏には、史料収集と整理を協働して頂きました。ここに感謝の意を表します。

注

- 1) 本研究の対象は、主に山スキーのコースである。調査文献には、「コース、スキーコース、下リノミノコース、スキー練習場、好スロープ、スキー滑走路」等の表現が見られるが、本研究ではこれらを総称して「スキーコース」とする。必要に応じて、スキー練習に適し、まとまった広さを持つスロープを示すため「スキー練習場」を使用する。他に「スキー場」「スキー地」という表現を、文献にそのように記載されている場合に、その内容を示すために使用する。
- 2) 大野精七（1885-1982）：北大医学部教授。ドイツ、フライブルグ大学留学、大正13年帰国、北大スキー部部长。宮様スキー大会創設や昭和15年に予定され中止された札幌オリンピック開催に尽力。スキーの発展に功績を残した。
- 3) 山崎春雄（1886-1961）：スイス、チューリッヒ大学留学。ヘルヴェチアヒュッテ所有名義人。昭和3年秩父宮殿下道時に準備委員長、昭和24年から28年、日本山岳会北海道支部長。
- 4) Max Rudolf Hinder(1887-1963)：スイス、フルンテルン（現チューリッヒ市の一部）出身の建築家。大正14年来札、パラダイスヒュッテ、ヘルヴェチアヒュッテ、空沼小屋を設計。昭和2年横浜に移転、昭和15年ドイツへ移住。
- 5) 大野精七『北海道のスキーと共に』（1971）p.68, p.372
- 6) 中浦皓至「北海道における近代スキーの発達に関する歴史的研究」（北海道大学大学院教育研科修士論文、2001）p.4。日本へのスキー伝来については、北大予科ドイツ語教師ハンス・カラーによる明治42年春のスキー取り寄せ、同年旭川第七師団長上原勇作による北鎮中への寄贈などがあるが、中浦は、集団性、継続性と技術向上、組織性と発展という条件から、フォン・レルヒによる高田のスキー講習会を「日本における近代スキーの発祥」としている。
- 7) 小澤丈夫、笹岡歩「スキー場に隣接する地域の形成過程 富良野市北の峰町を事例として」（日本建築学会学術講演梗概集、2008）、池村菜々、小澤丈夫他「スキー場とスキー場に隣接する地域の形成過程と空間構成 -ニセコひらふ地区を事例として」（日本建築学会北海道支部研究報告集、2008）など。
- 8) 小川勝次『日本スキー発達史』（朋文堂、1956）、加納一郎『北海道のスキーと山岳』（北海道山岳会、1927）北海道帝國大學文武會スキー部『記念：創立拾五年』（1926）、同『部報：1933』（1933）、北海道スキー部OB会『北海道大学スキー部七十年史』（1982）、北海道スキー連盟『創立五十周年記念誌』（1982）など
- 9) 森本光彦「Berg Hütte と Ski Hütte に就いて」（北海道大学工学部建築工学科卒業論文、1951）
- 10) 白坂蕃「中央高地梅池高原における新しいスキー集落の形成」（地理学評論、1991）、呉羽正昭「観光地開発に伴う首都圏周辺山村の変容 -群馬県品川村の例-」（愛媛大学人文学会創立20周年記念論集）など
- 11) 前掲書 6)。中浦皓至の著書には『日本スキーもうひとつの源流』（北海道大学出版会、1999）もあり、1925年に日本スキー連盟が設立され、客観的な史実が記録されるまでの著書の多くが、後の同連盟指導者による回想録で、出典が不明な記述や誤りを含むことを指摘している。中浦論文は、当時的小樽新聞と北海タイムスを中心とする調査により、多くの史実を明らかにしており、大正期のスキーに関する史実を把握するために信頼できると判断した。
- 12) 鉄道省は、大正9年まで鉄道院。札幌鉄道局は、大正8年まで北海道鉄道管理局、大正8年以降札幌鉄道局。明治45年には、すでに函館、札幌、旭川、釧路間の鉄道幹線が整備され、さらに道北と道東方面に鉄道が延伸される大正期と昭和期戦前において、両者は多くの旅行案内書を発行した（表2）。
- 13) 本稿では、旅行ガイドブック、パンフレット、スキーコースの具体的な案内が記載されている書籍を総称して旅行案内書と表現する。
- 14) 日本山岳会『山日記』初輯1930（昭和5）年、同第3輯1932（昭和7）年、同第7輯1936（昭和11）年、同第14輯、1948（昭和23）年。『山日記』は、昭和5年創刊、昭和17年第13輯迄毎年発行。第二次大戦によって一時休刊、昭和23年に第14輯発行、昭和59年発行の第50輯をもって廃刊。同書は、登山者の安全と利便のため、山小屋の継続的な調査を地元各山岳関連団体に依頼、最新状態を毎年更新しており、史料として信頼性が高いと判断した。

- 15) 稲田昌植、野村竜吉、荒木忠郎、徳岡松雄、二木春松、角倉邦彦
- 16) 鉄道通信管理局、札幌中学（現札幌南高校）、北海道師範（現北海道教育大学札幌校）、北海中学（現北海高校）
- 17) 北大スキー部は、大正2年12月22日蝦夷富士（羊蹄山）6合目まで、12月31日から翌1月1日に富士山登頂に成功するなど、すでに本格的な冬山登山の基本を徹底的に実施していたと中浦は記している。教程書については、『スキー術教程』大正7年11月初版、『Alpen Zeitung』（大正9年）、『山とスキー』（板橋敬一、加納一郎、大正10年初版、昭和5年迄継続）などを出版。
- 18) 松丸乙近（小樽高女）、佐藤林造（同）奥谷甚吉（小樽新聞）
- 19) 前掲書6）第2章、3章
- 20) 前掲書6）第3章
- 21) これ以前の明治45年鉄道院『遊覧地案内』は、全国の遊覧地を鉄道旅行するための案内書で、主要路線ごとに各駅の人口、公園、神社、農場、温泉などが簡潔に記述されるが、スキーには触れられていない。筆者が管見した中では、全国で初めてスキーが紹介されるのは、大正4年発行の本書である。信越線高田駅の欄には「冬期スキー練習場、西二十町」と記述され、妙高山下、高田金谷山の写真が掲載されている。
- 22) 昭和9年1月発行の図2では、青山温泉がイワオヌブリ北側にあるが、これは後に移転されたもので、この時点の青山温泉は昆布温泉の位置にあった。
- 23) 同書では、折り込みの北海道全体の鉄道地図と共に、各駅の地方史、人口、戸数、主要産物、森林、農場、官公庁、学校、会社、倉庫、温泉、河川、旅館等について、鉄道省発行の案内書よりも詳細に記述されている。
- 24) 前掲書9）p.124、p.127
- 25) 角幸博「マックス・ヒンデルと田上義也 -大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究」（北海道大学工学研究科博士論文、1996）p.215
- 26) 前掲書25）p.216
- 27) 前掲書25）p.218
- 28) 前掲書5）（p.372）によると、「（秩父宮殿下は）大野スキー部長のスキーヒュッテの連鎖の説明に大変御満足遊ばされ、殿下御自身もその連鎖のいずれかにヒュッテ建設のご希望を述べられた」とされている。
- 29) 戦前の北海道の山小屋については、山日記を原史料にして高澤光雄が「『山日記』に掲載された戦前の山小屋」（『北海道山岳』日本山岳会北海道支部、1999、p.145-p.152）にて纏めているが、筆者は『山日記』原本にあたることにより、戦前の北海道に建設された山小屋リストを作成した。
- 30) 前掲書9）p.123-124によると、大正期の山小屋は、積雪期の利用に対しては甚だ不完全なものでしかなかった。
- 31) 蝦夷富士附近は、比羅夫駅を拠点とした「スキー初心者よりは、登山スキーの練習に適する」スキー地として紹介されている。
- 32) 旅館について「百五十人位収容出来、乾燥室の設備は最も良い、殊に玉突きなどの設備があるのは山奥には過ぎてゐる」と記述されている。
- 33) 同使用規定によると、使用期間が「毎年十二月一日ヨリ翌年四月末日迄開設スルモノトス」とされており、使用券が甲（宿泊用）と乙（休憩用）に区別され、札幌驛（甲のみ）、銭函驛（甲乙）、小樽驛（甲のみ）で購入可能と記載されていることから、同山小屋が、主に冬季においてこれら3駅から山に入る一般者の宿泊又は休憩を目的としたものであることがわかる。
- 34) 本休憩小屋は、『山日記』には掲載されていない。
- 35) 昭和6年に定山溪鉄道が、定山溪付近のスキーコース図を発行しているが、内容は簡単な略図程度に留まっている。
- 36) 本書は昭和12年支那事変と国家総動員法後に出版。前書きに、「恵まれた環境の中に普及されたスキーは競技方面で（中略）“スキー王国北海道”を築き上げ、スキー登山の発達亦著しく、既に冬期間には缺くことの出来ぬ交通機関として實用化してゐる。（中略）スキーを馳つて活躍する夥しい人々に老若男女の別なく（中略）可憐な少年少女の元氣な姿など雪國の意氣と健康との象徴であらう。」とあり、スキーが普及したことが伺える一方で、「今や長期建設の秋、國を擧げて人的資源の強化を圖る時スキーの普及發達こそ冬期雪國の國民の心身鍛錬に最適なばかりでなく、軍事的にも重要な意義を持つことを自覺し、スキーの普及發達を圖らねばならぬのではなからうか。」とあり、スキーを國民の心身鍛錬の手段と考える時代に入ったことが伺える。
- 37) 小樽水産学校前をスタート、札幌の北大をゴールとするスキー駅伝。記録重視のスキー競技会の始まりとされる。札幌一中、札幌二中、北海中、小樽中、小樽水産、小樽商業、北海商業の7校が参加。札幌師範が欠場。前掲書6）p.88
- 38) 前掲書6）p.90
- 39) 前掲書6）p.150
- 40) 北海道スキー連盟『創立五十周年記念誌』（1982）p.118

（2009年7月9日原稿受理、2009年12月15日採用決定）